

身近な仏教用語

<https://www.nichiren.or.jp/glossary/#index>

愛嬌	あいぎょう あいぎょう	愛し敬うこと。仏教では仏・菩薩の優しく温和な様子を〈愛敬相〉といい、また、人々の和合親睦を祈り、互いに愛し敬う心を起こさせる行動を〈愛敬法〉といいます。 法華経普門品など一般仏典では〈あいぎょう〉と読み、中世末には〈あいぎょう〉とも読まれ、のちに〈愛嬌〉を当てるようになりました。
挨拶	あいさつ	〈挨拶〉も〈拶〉も押す、迫るという意味があります。 宋代頃から見える口語表現で、群衆が他を押しつけて進む意味。禪では、相手の悟りの浅深をはかるために問答をしかけることの意味に用います。転じて、日本では応答・返礼などの意味に用いられ、また出会いや別れの時の親愛の言葉や動作のことを一般に〈挨拶〉というようになりました。
阿吽	あうん	サンスクリット語において〈阿〉は口を開いて発する最初の字音であり、〈吽〉は口を閉じて発する最後の字音で、そこから万物の始原と終極を象徴するものとみなされました。一般には呼吸と吸気にあてて〈阿吽の呼吸〉といい、お互いの微妙な調子をさします。
阿修羅	あしゅら	サンスクリット語のアスラの音写。血気盛んで闘争を好む鬼神の一種。 もともとは〈善神〉を意味していたのですが、のちにインドラ神（帝釈天）などの台頭とともに彼らの敵とみなされるようになり、常に彼らに戦いを挑む悪魔・鬼神の類へと追いやられました。仏教では六道輪廻の中の一つに阿修羅界が位置づけられ、そのような心の状態（常に戦いを好む）を指します。
あばた	あばた	僧侶のあいだで主に天然痘の後遺症を指す隠語として用いられ、その後に日常語となりました。 原語のarbudaは〈あぶた〉といい、八寒地獄の最上部の地獄の名称でもあります。 あまりの寒さで皮膚に水疱、つまり「あぶた」が出来ることから、この名があります。
尼	あま	出家程度で剃髪し、染衣をつけ、尼寺にあって修行する女性を典型としますが、熱心に仏法を信じる女性も（尼入道・尼女房・尼御前）などと呼ぶことも多いです。 本来、尼僧に対する戒律は厳しい部分もありますが、日本ではやや緩やかです。 中古には貴族出身者は〈きげ尼〉と称して、髪を肩の辺りで削いで尼となる事ができました。中世以降の風習が一般に広まり、女性は、夫と死別し、離婚し、老妾となった時など、容易に尼となる事ができました。 源頼朝の死後に妻の政子は尼となり、政権を振り、尼將軍と呼ばれました。
天邪鬼	あまのじゃく	一般的には、ひねくれた性格という意味で使われ、人の意見に反対したり人からの称賛を喜ばなかったり、などの態度をとる人の表します。 元々は『古事記』と『日本書紀』に見る〈天探女（あまのさぐめ）〉に由来する悪鬼の呼び名です。心がねじれ、人の心を見透かしては悪事を働くことから、今日の様に人に逆らうひねくれ者の呼び名となりました。 また四天王像などの足下に踏み付けられている鬼や、毘沙門天像の鎧の腹部にある鬼面を天邪鬼とも呼びます。 これは、鬼面の鬼が中国の水の鬼（海若（かいじゃく））に由来すると考えられ、その〈海若〉を訓読すると〈あまのじゃく〉という事から、日本古来の〈天探女（あまのさぐめ）〉と習合されて、踏み付けられている鬼を〈あまのじゃく〉と呼ぶようになりました。
阿弥陀	あみだ	大乗仏教における重要な仏の一つ。 原語のAmitāyus（アミターユス）は「無限の寿命をもつもの、無量寿」、Amitābha（アミターバ）は「無限の光明をもつもの、無量光」の意味で、どちらも「阿弥陀」と音写されました。 阿弥陀信仰を主題とする経典として「無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」の浄土三部経があり、これらにもとづいて浄土教が成立しました。 「あみだくじ」という言葉の由来は諸説ありますが、くじの形式が阿弥陀如来の後光・光背に似ているから、という説もあります。
阿羅漢	あらかん	応供（おうく）ともいい、尊敬・施しを受けるに値する聖者を意味します。 インドの宗教一般においては、尊敬されるべき修行者をさします。 原始仏教・部派仏教では修行者の到達し得る最高位を示します。
有難う	ありがたう	有る事が稀である、滅多に無い事、という言葉から「有り難し」「有り難い」と使われるようになったと言われます。 仏教に由来する言葉だとされ、経典でもしばしば使われます。 例：人間として存在する事は有り難い（難しい）、死すべき存在でありながら寿命がある事は有り難い（難しい） この様に、私たちが日常で「当たり前」と思っていることも実は有り難い、稀な事であり、そこに感謝する事が大切だと説かれます。
行脚	あんぎゃ	「遍参（へんさん）」「遊行（ゆぎょう）」ともいいます。 僧侶が一ヶ所に止住しないで常に遍歴して仏法を学ぶ姿勢を表します。 この僧侶を「雲水」「行脚僧」「遊行僧」とも呼びます。
安居	あんご	仏教教団で、修行者達が一定期間一箇所に集団生活をし、外出を避けて修行に専念すること。また、その期間をいいます。 雨季の定住（雨安居）ともよばれます。 サンスクリット語のvarṣaは雨、雨季や歳を意味する言葉で、インドでは春から夏にかけて約3ヶ月続く雨季の間は、外出が不便であり、またこの期間に外出すると草木の若芽を踏んだり、昆虫類を殺傷することが多いので、この制度がはじまったとされます。
安心	あんじん	一般に、心が落ち着き心配のないことをいいます。 仏教では、信仰や実践（自己への精神集中、観心・止観）により到達する心の安らぎ、あるいは不動の境地を意味する。
按摩	あんま	現在はマッサージと同義語として用いられる言葉です。 奈良時代の『医疾令（いしつりょう）』には、按摩の職分として外傷・骨折の治療も含まれていたが、現代では「もみ治療」だけが伝わっています。 原語はサンスクリット語【paripīḍana（パリピーダナ）】であり、（身体を）あまねく圧する事を意味します。サンスクリット語での表現がある事から「もみ治療」は古くインドでも行われており、仏教の伝来と共に日本に伝わった可能性が高いと言われます。
威儀	いぎ	一般的に「威儀を正す」などと用います。 礼儀になつた挙動、作法どおりの動作を指し、日常の立ち振る舞いを仏教では行住坐臥（ぎょうじゅうざが）の四威儀とよんでいます。 行住坐臥とは、歩くこと、立ち止まること、坐ること、横になること、の4つを指し日常のおおよその行動を包含した表現です。
意地	いじ	意地の〈意〉は意識のことです。 それに従って煩惱が働き出しますが、その拠って働く場となることを〈地〉といったもので、意地と意識はほぼ同義語です。 一般にいう意地が意志の固まりを指しているのであれば、仏教語としての〈意地〉はやや異なる意味になります。
刹那	せつな	時間の最小単位。100指を弾く間に60あるいは65の刹那があるとされる。 きわめて短い時間。瞬間。75分の1秒、少数にすると0.013秒となります。 「刹那い」：どうしようもない。
以心伝心	いしんでんしん	ここから、ここから伝わる。 禅では真理の伝達は体験により、文字や言葉によらない、という意味を端的にあらわした語です。 現今では、文字や言葉によらなくても、心の中はそれとなく自然に伝わるという、一般的な意味に使われます。
韋駄天	いだてん	スカンダ（Skanda）は本来、ヒンドゥーの神で、シヴァ神の子。悪魔を打ち破る軍神。これがのちの仏教に取り入れられ、仏教の守護神となりました。 増長天の八大將軍の一つとされ、四天王の三十二將軍の筆頭に置かれます。 特に伽藍を守る神とされ、寺院の厨房などにその像が祀られます。 この神はその俊足で知られ、修行僧が悪魔に悩まされるときは、走り来たってこれを救うとされました。
一期一会	いちごいちえ	一期とは、人の生涯の間を表します。また、一定の修行期間を指して使われることもあります。 特に茶道では、一生運にただ一度だけ会うことを〈一期一会〉といい、一つ一つの瞬間は再び繰り返される事なく、その時その時を大切にしないさい、という意味になります。
一大事	いちだいじ	「一大事」と言いますと、私たちは普段「ただならぬ事、大事件」というような使い方をしますよね。 実はこの「一大事」という言葉も元を辿ると仏教の教えに起因する言葉なのです。 仏教用語としての一大事は、ただ一つの重大な事柄、または仕事の意味になります。 法華経方便品では、一切衆生に対して仏の智慧を開き示し悟らせ、その道に入らせることが「一大事」とされ、その目的の為に仏がこの世界に出現するとされています。 つまり仏様の大事業の意味で使用する「一大事」が元々の意味となります。
一念	いちねん	一般的に一念と言いますと、深く心に思うこと、一筋にその事を思うこと。 又その思い、といった意味で使われる事が多いかと思えます。 しかし、元々の意味に立ち返りますと、むしろ逆の意味になります。 元来の意味には2つの系統があります。 1つ目は極めて短い時間、一瞬間を意味するもので、サンスクリット語eka-kṣāṇa（エーカクシャナ）という原語に対応します。kṣāṇa（クシャナ）とは刹那と音写される時間の単位です。 2つ目は、心のわずかな動き、微細な働きを意味するものです。 サンスクリット語eka-citta-utpāda（エーカチッタウトパーダ）に対応します。 中国において天台の「一念三千論」の形成があり、これによって「一念」という言葉に大きな哲学的意味が与えられるようになっていきました。 要約しますと、一瞬一瞬の心の動きや思い、という意味が本来的な用例となります。

一味	いちみ	蕎麦にかけるのは一味派ですか？ 七味派ですか？ そのような調味料としてのイメージが強い（一味）ですが、もともとは仏様の説法を例えています。 ひとつの雲から降りそそがれた同一の味の雨が地上の大小さまざまな草木をうるおし、それぞれの性質に応じて成育・結実させるように、仏様はすべての人々に対して同一に教えを説き、人々はそれぞれの能力に応じてそれを聴受し修行することを言います。（一味の法）（一味の雨）とも表現されます。
曇	いらか	カワラの古い呼び方であり、瓦屋根を指します。 一見、仏教とは関係無い言葉のようですが、原語はサンスクリット語 [iṣṭhaka (イシュタカ)] のプラークリット、パーリ語の [iṭṭhaka (イッタカ)] に由来し、どちらも〈瓦や陳瓦〉という意味です。 イッタカのタが半舌音でありラ音に近いので、イラカと発音されました。 仏教伝来と共に屋根葺材として日本に輸入されました。
引導	いんどう	相手に引道を促す、一線を退くきっかけを与える慣用句に「引導を渡す」という言葉があります。 古くは漢の王充（おうじゅう）の『論衡（ろんこう）』に「業を服して引導す」とあり、大気を導いて体内に引き入れる道教的養生術。また『南史（なんし）』王僧弁（おうそうべん）伝に「群魚有りて水に躍り空に飛びて引導す」のように、手引きする、案内の意味にも用いられていましたが、仏教では法華経（ほけきょう）方便品「無数の方便を以て衆生を引導す」のように、人びとを導いて仏道に入らせるという意味に用いられます。 現在では、葬儀の際に導師から、亡くなった方に対して、この迷いの世界から浄土へ導く儀式作法を行います。この作法の事を〈引導を渡す〉と表現します。 これが転じて、冒頭に用いられるような慣用句になったと言われます。
因縁	いんねん	一般的に「いんねんをつける」と言えば、言いがかりや、嫌がらせをする事を指します。 本来の意味は、因（hetu（ヘートゥ））、縁（pratyaṃya（プラティヤヤ））というサンスクリット語の訳であり、前者は直接的な原因、後者は間接的な原因・条件を表します。 この世に存在する物事は、すべて因と縁によって成立しているため因縁生起（いんねんしきうき）とも言います。人間の存在や自然界など、すべて因縁によって一時的に結ばれ、また解けていきます。 何一つ固定的な存在は無く、生滅を繰り返して変化を続けるというのが、仏教の根本的な思想です。
浮世	うきよ	一般的には厭世的な意味合いで使われることが多い言葉です。 元々は定めのない世、常に変化をする世の中という意味でしたが、平安時代に、つらい世の中を嘆く心情と仏教的無常感（常に変わりゆくという世界観）が結びついて〈浮世〉を〈憂き世〉などの字を当てて、嘆かわしい現世を表現する用法が一般化しました。 その表現が当時の和歌や物語など文学の1つのテーマとなっていました。
有相無相	うそうむそう	相とは、特徴・属性の意味であり、それらの有無によって「有相」「無相」とに分ける事が多い。また、存在するものと存在しないもの、などを意味することもあります。 なお、種々雑多な、取るに足りない人々や物事を意味する「有象無象」は、この「有相無相」から転じたものだと言われています。
有頂天	うちょうてん	相手に褒められたり、喜ばしい事があった時に「有頂天になる」、また喜びの最中にあり、周りが見えていない状態の人を指して「あいつは有頂天になっている」と表現する慣用句があります。 この〈有頂天〉とは、元来は天のなかの最高の天の意味を表します。 〈有頂〉の原語 [s:bhava (バヴァ) -agra (アグラ)] は有(bhava-存在)の頂き(agra)を意味し、最高の場所を指します。 〈天〉は六道輪廻の天界を意味すると同時に、そこに住む者をも意味します。「有頂天に登りつめる、絶頂をきわめる」の意から転じて、喜びで夢中になることを「有頂天になる」というようになりました。 〈天界〉という、とても良い状態のように感じますが、実はまだ迷いの世界である六道の中です。 次の瞬間、地獄に落ちるかもしれませんし、餓鬼界に往くかもしれません。 〈有頂天〉になっている状態をイメージしてもらおうと分かりやすいですが、喜びによって気分は高揚していますが、その足元はフラフラで不安定な状態です。まさに「心ここにあらず」ですね。 〈有頂天〉の時こそ、足を拘われない気を引き締めていきましょう。
有耶無耶	うやむや	物事をはっきり結論づけずに雲散霧消していくさまを「うやむやになる」と表現します。 この言葉も仏典に由来する言葉です。 あるかないか明白でないこと、おぼろげなさま、曖昧模糊(あいまいもこの状態を〈法華経方便品〉には「存して有(う)と為さず、亡びて無(む)と為さず」と記されています。
盂蘭盆	うらぼん	盂蘭（うら）とは、ご飯のこと、盆とは、そのご飯を盛る器の事です。 雨季の安居の最終日に、僧侶が他の僧達に罪を指摘してもらって懺悔し、僧団が最も清らかになる自恣の日に、亡き親などへの追善を願って僧侶たちに盆器に盛った食事を供養することになり、盆行事が由来します。
有漏有漏	うろうろ	道に迷ったり、どうしても良いのが判断できずに困って彷徨っている様子を、一般的に「うろうろする」と表現します。 これは様々な心の汚れを表す総称です。煩惱と同じような意味です。 サンスクリット語では有漏を [sāsra (サースラヴァ)] と書き「流れ出る」ことを意味します。 私たちの六根（五感+意識）から煩惱が流れ出て、心が惑う状態を有漏と言いますが、それが重なり（うろうろ）と表現されるようになりました。 一方、流れ出る煩惱や汚れが無い状態を〈無漏（むろ）〉と言います。ですので、あえて覚りに至った人を表現するなら〈むろむろ〉となります。
会釈	えしゃく	一般的には、人と人が行う軽い挨拶の意味で使われます。 元々は、お経の中の異なる意見を照合してすり合わせ、その教えの根本に立ち戻り、内容を矛盾なく説明する事の意味です。その意味が転じて、異なる意見の調和をはかる、相手と上手く調和する、対応するとなり、さらに転じて、軽い挨拶の意味になったとされます。
縁起	えんぎ	一般的には「縁起が良い、悪い」など、幸不幸の前兆的な意味や、寺社仏閣や仏像などの由来や沿革を指す言葉として用いられます。 しかし本来の意味は、仏教の重要な教説を指す言葉です。 私たちの苦しみに原因があり、その原因を消滅させる事で苦しみが消える、といった生きる上で生じる〈苦〉の原因や条件を追求し解き明かしたものが〈縁起〉です。 仏教では、日常で生じる〈怒り〉〈不安〉〈猜疑心〉などなど、それら全てを〈苦〉と表現します。 その〈苦〉の原因には〈無明〉が存在します。〈無明〉とは自己中心性と言います。 自分の事しか見えていない、視野が狭い状態ですね。 この状態から何か行動を起こしたり、発言をしたり、思考すると、巡り巡って〈苦〉が生まれる。 〈無明〉→〈苦〉 一方〈無明〉を抑え、他者への共感性、慈悲を持つことで、結果的に〈苦〉を減らす事ができる、この考えが〈縁起〉です。 〈無明〉×→〈苦〉× 〈縁起〉は発展段階や時代により様々な表現がなされますが、一番シンプルな表現をすると下記のようになります。 「此れ生ずるが故に彼れ生ず、此れ滅するが故に彼れ滅す。」
演説	えんぜつ	『広辞苑』には「多くの人々の前で自分の主義主張や意見を述べること」と定義し、現在は選挙の際につきものとして使用される言葉です。 演説は江戸時代に演舌と書き、演説は福沢諭吉の新造語だと解釈しますが、誤りです。 元来は仏法を説く事、またはその教えを述べる言葉を指します。 古く維摩経などでも「如来は一音をもって法を演説したまひ」などと用いられ、説経や唱導と同じ意味で仏教語として存在していました。 サンスクリット語 [s:nirdeśa (ニルデーシャ)] の訳語です。
閻魔	えんま	一般的には閻魔という、地獄の裁判官としてイメージするかと思います。 サンスクリット語のyama (ヤマ) の音写で、エンマと呼ばれるようになりました。 古くは古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』の神話の中で、死後の安楽な場所での王者として描かれていましたが、ヒンドゥー教の影響で閻魔は仏教に取り入れられ、さらに中国の道教などの影響をうけながら複雑な性格をもち、今日のイメージへと至りました。
大げさ	おおげさ	一般的には、物事を実際より誇張する様子を指します。 仏教では、修行僧の正装で、三種類の袈裟のうちの最も大きい袈裟を指します。 その大きい袈裟の行まいが威儀張ってものものしい所から、一般的な大げさという意味に転用されたと言われます。
御蔭	おかげ	他者から受けた恩に対して「おかげさまで・・・」とお礼の意味を表す時に用いられる言葉です。 本来の意味も、他から恩を受けることに対して用いますが、特に自然の脅威や病氣・社会善など生命や生活が危機に陥った際に救ってくれる諸神・諸仏への恩を指します。 これらの諸神・諸仏に対し報恩的行為を起すのを（おかげ参り）（お礼参り）などと呼びます。 伊勢参堂や諸国の寺社・霊場巡礼の風習もこの思想に起因しています。
億劫	おっくう おくう	きわめて長い時間、ほぼ無限の時間を表します。 〈百万億劫〉の略で、〈劫〉自体がすでに極めて長い時間を表す言葉ですが、それを「100×100×1万×1億」することで、さらに意味を強めた言葉です。音が転じて〈おっくう〉となり、あまりにも長く耐えられないことから、煩わしくて気が進まない様子を意味する一般的な用法になりました。
我	が	原語のアートマンは、人によって様々なイメージをもつ単語です。 語源に遡ると、ドイツ語のAtemと同じく、氣息、呼吸を意味し、本体、霊魂、自我などを表します。インドの諸哲学が個人をさらに掘り下げて、常住・単一・主宰的なアートマンを重視するに対して、仏教は固定的で不変なアートマンを否定します。 私たちは、日常の中で色々な食材の命を頂き、関係する人々に影響を受けながら成長していきます。つまり様々な影響や諸条件が集まって構成される存在であるので、アートマン「我」とは常に変化する存在であると定義します。 また、勘違いされやすい「無我」もニヒリズムではなく、固定的な我は存在しないと捉えられます。

開発	かいほつ	一般的には、土地・鉱産物・水力などの天然資源を活用して、農場・工場・住宅などをつくり、その地域の産業や交通を盛んにすること。 また、新しい技術や製品を実用化すること。を指します。 仏教では、教化もしくは修行にかかわる表現として使われます。 文脈によって意味が異なりますが、大別すると3つに分類されます。 1. 迷いや妄想を取り除く 2. さとりに向けて修行しようという心を起こす 3. 他者をさとりに導くという気持ちを起こす 自分の中に眠る、自分や他者に対する前向きな気持ち（資源）を掘り起こし、顕在化させていくことに開発という言葉が使われます。
餓鬼	がき	原語のpreta（プレータ）は死せる者、逝きし者を意味し、ヒンドゥーでは死後1年たって祖霊の仲間入りする儀礼が行われるまでの死者霊をさします。 死者霊としての餓鬼と重なりつつ、さらに重要な用法として六道輪廻の1つ「餓鬼道」の住人たる餓鬼です。 餓鬼道は生前に嫉妬深かったり、物惜しみ貪りの心が強かった人が堕ちる世界と表現されます。
覚悟	かくご	一般的には、悪い事態や大事を予測して心の準備をすることを意味するかと思います。覚悟の文字は2つとも「さとる、さすと」という意味の漢字です。覚悟はこの「さとり」を表す2語からなる複合動詞です。 仏教のなかでは、眠りからさめるという意味でも用いられますが、特に「迷いからさめ、さとりに至ること、真理をさとること」を指して使われます。
学者	がくしゃ	現在では、何らかの学問の研究や教授を専門職とする人、並びにその職業人の総称として使用される言葉ですが、仏教では特に、仏道を学ぶ者を意味します。 《学生（がくしゅう）》《学匠（がくしゅう）》《学徒（がくと）》などがほぼ同じ意味で用いられます。
学生	がくしゅう	現在では、一般的に学生（がくせい）と呼び、特に大学で学業を修めている人を指します。 元々は《学匠（がくしゅう）》《学侶（がくりょ）》ともいい、仏道を学習する僧、儒教などを学ぶ者を指し、大学寮の学生を意味していましたが、後に大寺で学ぶ僧も指すようになりました。 最澄（さいちよう）は、国の未来の為に大乘仏教の僧の養成が不可欠と考え、大乘の戒によって授戒し、学問・修行させる制度『山家（さんげ）学生式』を制定し朝廷に許可を求めましたが、残念ながら存命中には許可が降りず、没後7日目に許可され、翌年から大乘戒の制度が始まりました。 また、遣唐使に同行して往復する学問僧を選学生（げんがくしゅう）、長く唐に留まって学問する僧を留学生（るがくしゅう）と呼びました。 有名な選学生には最澄、留学生には空海が名を連ねます。
火災	かさい	火災という点、火事と同じ意味で使われる言葉です。 仏教の世界観によると、世界は成住壊（じようごう）、存続期（じゅうごう）、破壊期（壊ごう）、空無期（くうごう）の4つの時期があり、これが循環的に繰り返されます。破壊期の最後には世界を滅ぼす三種類の災厄が起こります。それを三災と呼びますが、その中の一つに《火災》が存在します。
瘡蓋	かさぶた	一般的には「はれもの、傷などが治るに従って、その上を生ずる皮」として認識されていると思います。かさぶたの《かさ》はサンスクリット語の【kasa（カーサ）】に由来する語であり、おでき等を意味する言葉です。
我他彼此	がたひし	建物や家具のつくりが悪く、きしむ音や、扱いが乱暴で音がうるさい様子を指して「がたびしと音がする」など表現する事があります。 この《がたびし》は《我他彼此》と書きます。 《自己》と《他者》、《彼（かれ）》と《此（これ）》とが対立衝突して、闘争葛藤の絶えない様子を表します。 その《我他彼此》から派生して、立て付けの悪い家具・建具の出す雑音や、物事が円滑を欠くさまを形容し、現代語の《がたびし》に転用されました。
我慢	がまん	煩惱の一つで、強い自我意識から生まれる慢心のことです。 仏教では、自分を固定的な実体とみて、それに執着することで起こる、自分を高く見て他を軽視する思い上がりの心を《慢（ま）》と呼び、このような心の状態を分析して、三慢、七慢、九慢と説きます。我慢はこの七慢の中の一つです。 現在使われる、自分を抑制する、耐え忍ぶといった意味に使われるのは、我慢を張る、強情の意味を介した転義で、近世後期からの用法です。
甘露	かんろ	サンスクリット語のアムリタ [amrita] の訳語で、アムリタとは不死を意味する言葉です。 古代インドの『リグ・ヴェーダ』※1には、それを飲めば不死が得られ、光となり神となると云い、soma（ソーマ）酒※2を賛美する一節があります。 そこで、本来はソーマ酒をアムリタと云ったようです。 仏教では《さとり》を指す涅槃をアムリタとも云います。 甘露の法門、甘露門などは《さとり》への入り口と意味を持ちます。 甘露醃、甘露膏、甘露梅など、甘さや甘辛さを表現する言葉として日常生活にも浸透しておりますが、本来の意味は《苦》が消滅した、平穏な心の状態を表しています。 『開目抄』の一説に「毒薬変じて甘呂となる」とありますが、辛い体験や苦しい体験も、延いては自分の心の栄養や糧となる、という意味からもわかる通り、ただの甘さだけを表す言葉ではありません。
機嫌	きげん	一般的には「機嫌が良い」など、その時の気分や感情を表現する言葉として用いられます。 元々は世間の誇り（そしり）、嫌われる事を意味します。 仏教では、その行為自体が罪悪であるものを戒める戒律を性戒（しょうかい）と呼び、それに対して、その行為自体は善でも悪でもないが、罪惡を誘発しやすい行為を戒める戒律を遮戒（しゃかい）と呼びます。例えば、財産の貯蓄や贅沢な物を持つ、というような事です。窃盗や妬みを誘発しやすい事例ですね。 そのような自他ともに罪惡を誘発しないように、自己を慎み、相手の気心を察するところから《機》をみる意味で《機嫌》と書きました。 さらに、相手の気心をうかがうことから「安否を問う」「ご機嫌いかがい」「気分が良い」などの気持ちを表す言葉として使われるようになりしました。
鬼子母神	きしもじん きしばじん	ヒンドゥー教の伝承では、夜叉神 [pāncika（パーンチカ）] の妻とされます。 ザクロの枝を持つのは、ザクロの実が多いことから多産を象徴し、日本では子育てや出産の神として信仰されます。仏教では、他人の子供をさらって殺していた詞利帝母（かりていも）、※サンスクリット語 [hārīti（ハーリーディー）] の音訳の末子を釈迦さまが隠し、彼女の非行を悔い改めさせたという説話が有名です。
鬼籍	きせき	一般的な慣用語として「鬼籍に入る」というと、誰かがお亡くなりになった事を表します。 寺院に置いてある過去帳も指します。 日本語として《おに》という語は非常に多くの意味内容を含みますが、ここでの鬼は本来の語義通り死者を指します。 中国の思想において、人が死ぬと精神を司る魂（こん）は天に昇って神となり、肉体を司る魄（はく）は地に落ちて鬼（き）になるとされています。 その鬼となった死者を帳簿に記録したものが鬼籍簿や過去帳とよばれました。
吉祥	きちじょう きっしょう	元々はめでたいことが起こる前兆、またはめでたいことを表します。
吉祥天	きちじょうてん きっしょうてん	サンスクリット語のシュリー・マハーデーヴィーの訳語です。 密教における天部の神ですが、ヒンドゥー教では福德の女神ラクシュミーで、シヴァ神の妃とされます。 仏教では、毘沙門天の妃とされ、福德を授ける天女として信仰されます。 今日でもインドで人気があり信仰を集めています。
喫茶去	きっさこ	中国唐代の禅僧、趙州從諗（じょうしゅうじゅうしん）の言葉として有名です。 もともとは「お茶を飲みに行け、お茶を飲んで目を覚まして来い」の意味で、相手の怠惰を叱責する言葉でした。 後には「お茶を召し上げれ」の意味に解釈され、お茶を飲むという日常の中に深い覚りのはたらしきを見ることができるようになりました。
苦	く	苦しい、苦痛と云うと、どのような状態を思い浮かべますか。 苦痛を大別すると、身体的苦痛と精神的苦痛に分けられます。 どちらも大変辛い状況ですが、仏教では後者の精神的苦痛に対するアプローチに比重が置かれています。 精神的な苦痛といっても原因や症状も様々ありますね。怒り、不安、猜疑心、嫉妬・・・、数えきれない程の苦痛があります。 しかし、その精神的苦痛の根源は同じです。それは「思い通りにならぬ」です。 現実を正しく認識出来ないこと、自己中心的に物事を捉えることにより、現実と自分の想いの間に生まれるギャップが精神的苦痛の根源です。 その苦痛を仏教では「苦」と呼びます。 それを解決していく道、方法論が仏教です。
空	くう	「空」は、しばしば、何も無い「無」という言葉と混合されがちですが、固定的実体が無いという意味であり、存在が「無」ではないという事が大切です。 仏教では様々な諸条件によって自分やモノゴトが存在している、成立していると考えます。 固定的で不安なモノゴトは無いですが、諸条件が構成した結果としての存在はあります。抽象的ですので、例えでご説明します。 ここに小枝が2本あります。左の小枝は右に比べて長く太いです。 この左の小枝は、長く太い小枝、右は短く細い小枝です。 しかし、さらにもう一本、より長く太い枝を加えたらどうなりますか？ 今まで、長く太い小枝だったものが、中くらいの小枝に変化します。 この小枝に与えられていた属性・ラベリングが変化しました。 属性や肩書、ラベルは比較するもの、状態、月日によって変化し固定的ではありません。しかし、枝としての存在はどのような属性が与えられても存在しています。 この場合、小枝の長い短い太い細いなどラベリングが「空」という事になります。 私たちにも、肩書や地位、属性などが常に存在しています。しかし、それは常に条件によってたまたま与えられているだけで、固定的ではなく変化をしていきます。 しかし、変化をしながら自分は存在し続けていきます。 この変化しながら存在するという考え方が「空」です。

久遠実成	くおんじつじょう	<p>仏伝では、釈尊は35歳の時、ブツダガヤで覺りを開き80歳で亡くなるまで、多くの人々に教え伝えてきた、と記されています。</p> <p>しかし法華經の從地湧出品（じゅうじゅじゅっばん）には、釈尊に教化を受けたという無数の菩薩達が登場します。</p> <p>その様子を見た弥勒菩薩は「覺りを開いてからの約40数年でこんなに多くの人々を教化したとは信じられない」という疑問を伝えます。</p> <p>その答えを釈尊は如来壽量品（にょらいじゅうりょうほん）で説きます。</p> <p>「人々はブツダガヤで初めて覺りを開いたと思っているが、実はとても遠い昔に覺りを開き、とても長い時間をかけて教化を続けてきた」と答えます。</p> <p>この経説を（久遠実成）といいます。</p>
苦行・修行	くぎょう・あらぎょう	<p>元々、難行・苦行とは人間自然の欲望を抑えて精神力を鍛えることを目的としていました。飢餓を抑えて沈黙の戒となり、食欲を抑えては断食、性欲を抑えては禁欲となります。人はこれらに耐えて精神力を涵養しますが、さらに積極的・人間的に肉体を苦しめることを愛めました。</p> <p>例、灼熱の太陽の下で火を焚き曇りに耐える。真冬に水に籠もって寒さに耐える。</p> <p>それらが発展し「修行」となり、これらの身体的苦痛に耐える間に強度の神秘力や神通力を己の内に蓄積すると信じられていました。</p> <p>苦行の原語である【tapas（タパス）】は熱、熱力という意味があります。</p> <p>長時間にわたり苦行を続ける事で、自分の中に「熱力」が溜まっていき、それが神通力へと昇華すると考えられています。</p>
愚痴	ぐち	<p>グチをこぼす、と言いますが、日常の軽い不平不満を親しい人に聞いてもらうイメージですね。</p> <p>仏教では愚痴と言いますが、苦しみの根源（無明（むみょう））と同じ意味で使われます。</p> <p>自己中心的なマインドにより、周りが見えていない状態を（無明）と呼びますが、愚痴はその（無明）と同様に様々な苦しみを生み出す根源的なものと捉えられています。</p> <p>グチというと、言っても仕方ないことを言っておく、なんだか軽いものに感じられますが、苦しみの根源と考えると、こぼさないに越した事はなさそうですね。</p>
工夫	くふう	<p>手段そのもの、あるいは手段を講ずるという意味で古くから用いられた言葉ですが、唐代には、手間ひまかけること、努力すること、さらには手間ひまかけるだけの時間的余裕を意味する俗語として用いられるようになりました。</p> <p>禅宗では、主に參禅修行に励み、様々な努力を重ねるという意味で盛んに用いられるようになりました。</p>
供養	くよう	<p>「供養する」「供養になる」など、動詞として用いられるのが一般的です。</p> <p>サンスクリット語の語根、敬うという意味の【rūj（アージ）】からつくられた言葉【pūjā（プージャー）】の訳語が供養となります。</p> <p>元々は尊敬や敬意を表します。</p> <p>プージャーは、仏様に華や香りを捧げ、供える事から、後には死者の霊を祀って供物などをお供える事も指すようになりました。</p> <p>元々の意味にある通り、慣習や形だけの供物や儀式はプージャーになりません。</p> <p>そこに尊敬や敬意、気持ちが重なってプージャーになるという事を心得ておきましょう。</p>
袈裟	けさ	<p>サンスクリット語のカーシャヤの音写です。</p> <p>もとは「黄褐色の」という形容詞です。</p> <p>仏弟子の衣服を表し、釈尊時代には、路肩などに打ち捨てられた布切れを拾い集め、つなぎ合わせてつくった外衣を指しました。</p> <p>従いまして、当初は粗末な衣類を意味していましたが、後には次第にさまざまな色彩を用いた衣服となり、飾りがつくようになっていきます。</p> <p>現在では、綴り合わせる布の数で五条、七条、九条、十三条などの種類があります。</p> <p>袈裟を左肩から右の脇下にかけては「偏袒右肩（へんだんうけん）」というインド古来の風習によるものです。（袈裟がけ）などの身に付け方は、この袈裟の習慣からくるものです。</p>
结界	けっかい	<p>サンガの僧尼の秩序や聖性を維持するため、ある一定の区域を区切ることを意味します。その標識として石や木などが使われてきました。</p> <p>現在では、主に堂内などの清浄な場所として、麻縄や幣束などを用いて標識とする形式が多く見られます。</p>
玄関	げんかん	<p>古くは北極の閼門を意味し、また家宅の正面の入り口を意味します。</p> <p>玄とは仏教の奥深い教えを意味し、関はそこへ入る閼門となりますので、玄関とは仏教の教えに出入り口となります。</p> <p>寺院の門や禅院の入り口を指すこともあります。</p>
香	こう	<p>インドの気候は高温で体臭など悪臭が強くなりやすく、また香木が多く取れることから悪臭を取り除くために香をたいたり、身体に塗ったり、衣服につけたりする風習が古くよりありましたが、その風習を仏教でも取り入れ、香をたいて供養を行うようになりました。中国や日本では、仏教伝来以前に香をたく風習はなく、仏教と共に始まった行為です。</p> <p>白檀や沈香などの香木を削って刻んだものが、お焼香の時にたく刻み香ですが、それをさらに細かくして粉末状にしたものが線香になり、それを棒状に加工したものが線香になります。</p>
業	ごう	<p>一般的に、「ごうを煮やす」「ごうが深い」など使用されます。</p> <p>もとはサンスクリット語【sakarman】の訳語であり、「つくる」という動詞【√kr（クリ）】から派生する言葉です。</p> <p>人間の行為全般を指しますが、身体的なものはたらしみに限らず、言葉や心のはたらしみまでを含みます。</p>
講	こう	<p>もとは仏典を学び、また教えについてディスカッションする集まり。</p> <p>論議の集会是講演などと呼ばれます。</p> <p>講の次第を講式とも呼ばれ、鎌倉時代には講の儀式の時に節をつけて読誦する文章を指すようになりました。</p> <p>時代を経て室町時代に起こった和讃のもとになったのが講式です。</p> <p>江戸時代には念仏講、観音講など庶民の信仰的な集いや、一般的な集まりも講と呼ばれるようになりました。</p>
根気	こんき	<p>日常的には「こんきのいる仕事」「こんをつめる」などで使う事多い言葉です。</p> <p>根気は、もとは根機と書き、機根（きこん）とも云われています。</p> <p>機根はさとりを得るための宗教的素質、状態を指す言葉です。</p> <p>根気の根はサンスクリット語【indriya（インドリヤ）】の訳語で、この場合は感覚機能の、眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）の五感を指します。</p> <p>この五感の優劣が、そのままさとりへの可能性、宗教的素質の優劣を表すようになりました。</p>
言語道断	ごんごどうだん	<p>一般的には「もってのほか」「論外」のような怒りを含んだ否定の際に用いられます。</p> <p>元々は漢字の通り、言葉の道を断つという意味でした。</p> <p>仏教の認識によれば、モノゴトを理解するのに言葉による認識を離れることがサトリへの道だと考えられています。ですから言語道断とは、言葉による認識の囚われを離れ、言語表現が出来ない境地へ歩みを進めるということになります。</p>
魂魄	こんぱく	<p>人間の体に宿ってその活動をつかさどる神秘的な力やたましいを指します。</p> <p>（魂）は人間の精神の働きを司る陽気の神靈。</p> <p>（魄）は肉体を司る陰気の神靈です。</p> <p>人が生きている間、魂魄はその身体にとどまっていますが、死ぬと身体から離れ、魂は天に昇り、魄は地に歸ると考えられていました。</p>
金毘羅	こんびら	<p>サンスクリット語【s:kumbhira】の音写です。</p> <p>もともとはガンジス川に生息するワニですが、そのワニが神格化し靈魚とされました。</p> <p>原住民の間で恐れられると共に崇拜もされていたので、やがて仏教に取り入れられ仏法を守護する天部として信仰を集めました。</p>
金輪際	こんりんざい	<p>大地の一番底の所。</p> <p>仏教の「須弥山（しゅみせん）」という世界観では、大地は虚空に浮かぶ、風輪・水輪・金輪の上に乗っているとされます。</p> <p>その最上層である金輪と、その下の水輪との際は、金輪の際なので「金輪際」と呼びます。</p> <p>転じて、ものごとの最後の最後まで、徹頭徹尾の意味に用いられるようになりました。</p>
持戒	じかい	<p>戒を持つ、というルールを守るという意味にとれますが、原語の「シーラ」は「習慣性」を意味する言葉です。自分にとって良い習慣を身につける、というのが持戒の意味です。</p> <p>“良い習慣を身につける”という当たり前に聞こえますが、仏教ではとても大切にしています。</p> <p>それは、「戒（習慣）が自分を守る鎧になる」という考え方があるからです。</p> <p>たとえば、寝る前に必ず歯磨きをする、という習慣を持っているとします。</p> <p>ある時、飲み会から帰ってきて、疲れてるし面倒だからそのまま寝たい！と考えても、日常の習慣が後押しをして歯磨きをサガる事を止めてくれます。</p> <p>良い習慣を身につけていると、悪い方向にココロが引張られるのを引き止め、考える時間を与えてくれます。これが日常生活のなかで、怠けや自己中心的になるココロから、自分を守ってくれる鎧になるという意味です。</p>
四苦八苦	しくはっく	<p>「四苦八苦する」というと、現状がとても辛い状況、切羽詰まった様子を表す言葉で用いられます。</p> <p>四苦八苦とは、人が生きる上で避けては通れない（苦）の種類を表しています。</p> <p>まず、四苦とは生老病死です。人は生まれる場所、条件を選べません。人は必ず歳を取り老います。そして病気にもなります。</p> <p>やがて寿命がくれば死に至ります。この四つが人間の根源的な苦しみであると説きます。</p> <p>そして八苦とは、この四苦にさらに下記の四つを追加して八苦となります。</p> <p>愛別離苦（あいべつりく）・怨憎会苦（おんぞうえく）・求不得苦（ぐふとつく）・五蘊盛苦（ごうんじょうく）の四つです。</p> <p>仏教では、この四苦八苦は人間が生きている上で避けては通れない、根源的な（苦）として表します。</p>

地獄	じごく	悪業を積んだ者が堕ち、種々の苦しみをうけるとされる地下世界の総称。 經典には様々な地獄の様相が説かれますが、いずれにしても、古代インド社会における業報輪廻の世界観の定着とともに、仏教でも早くから地獄思想を取り入れ、悪業の報いとして地獄が盛んに説かれました。 この地獄を死後の世界として、生死を跨いだ先に捉える一方で、日々の中で自分の心の中に存在する、瞬間的な心の揺れ動く先に存在するという捉え方もあります。 地獄の別称である「奈落」は、地獄の原語である【naraka (ならか)】が音訳され、奈落とされました。
実際	じっさい	日常語としては「実際に～である」という使い方が一般的で、本当に、全くという意味で用いられます。 仏教用語としての(実際)はサンスクリット語【bhūtakoṭi (ブータコティ)】または【koṭi (コティ)】の訳であり、存在の極地点、際を意味する仏教用語です。 存在の極限を意味する事から、涅槃などと同義語で覚りの世界、状態を表す言葉としても使われます。
自然	じねん	一般的には、山や川、草、木など、人間と人間の手の加わったものを除いた、この世のあらゆるものを指して使われることが多い言葉です。 仏教語としては、それ自体で存在するもの、おのずからそうである事などを指します。 古来より日本人の自然の捉え方は、客観的な、人間の外側にある自然体系ではなく、内側に存在するものを指していました。 それが仏教的な(ジネン)の意味です。 現代的な(シゼン)は、明治時代後半に輸入された(英・ネイチャー)〈仏・ナチュラル〉を日本語に訳した時よりの意味合いです。 そういう意味では(ジネン)は日本人の根底にある思想ですが、(シゼン)は外来語ですね。 仏教語としての(ジネン)は、「オノズカラシカナリ」という訓読みの如く、外側にある客観的な生態系ではなく、人間の内側にある「このようにありたい」、という理想的なあり方を表しています。
娑婆	しゃば	一般的には、この世、世の中のことを表す言葉です。 原語はサンスクリット語【saha (サハー)】の音写になります。 音写ですので娑婆という文字自体に特別な意味はありません。 仏典(例、『妙法蓮華経』如来寿量品第十六)では娑婆世界と表し、仏国土である浄土と対に用います。 娑婆は他の呼び方で忍土(にんど)と表現する事もあります。 これは、サンスクリット語のサハーが意味する「耐え忍ぶ」という意味から訳されたものです。 娑婆を、かつての刑務所などでは slang として、外の世界・一般社会を指して用いる言葉でもありました。
邪魔	じゃま	「じゃまもの扱い」「じゃまが入る」の他にも「おじゃまします」など訪問の際、相手に詫言することにも用いられます。 本来はサトリを妨げる邪悪な悪魔のことで、釈尊がサトリを開く前に出現した波旬(はじゅん)【s:pāpīman (パーピマン)】という邪魔のことを指しました。 ちなみに魔とはサンスクリット語【s:māra (マール)】を音写する際に、マの音を表記するために中国で漢字を新しくつくり、魔羅の訳語を用いました。従いまして魔という漢字には意味はありません。
舍利	しゃり	日本ではお米の事を、「シャリ」や「銀シャリ」と表現する事があります。これはサンスクリット語śarīra (シャリーラ)からの音写です。 śarīraとは骨髄・構成要素・身体を意味します。このシャリーラが複数形になると遺骨という意味も表します。小粒で白く綺麗なお米が、お釈迦様のご遺骨である舎舍利(ぶっしゃり)のようだという事から、お米の事を「シャリ」と呼ぶようになったと言われています。
自由	じゆう じゆ	一般的には、何にも縛られず思いのままであること、古くは勝手気ままな振る舞いにも使われました。 仏教ではサンスクリット語【svayam (スヴァヤン)】の訳語で、独立自在である事、それ自体で存在する事を意味します。 それは「自らに由る」事を意味し、何かに依存せず、寄りかからずに存在しうる、という事から、(さとり)の境地を表す言葉にも用いられます。
出世	しゅっせ	一般的には、会社や組織の中で昇進し、然るべき地位や肩書きが付くことを指します。 しかし、仏教ではむしろ真逆で、世間(世俗)を離れて、仏道に入ることを意味します。 そこから僧侶のことを(出世者(しゅっせしゃ))とも表します。
寿命	じゅみょう	一般的には、生きていく間やその長さ、または、物が損傷せずに働きが保たれている状態を表現します。 仏教では、例として俱舍論(くしゃろん)では生命力「命根(みょうこん)」を本体とし、寿「年齢」、暖(だん)「体温」、識「意識」を有しながら働くものが寿命と表現します。 サンスクリット語では【s:āyus (アーユス)】を寿命と訳します。
精進	しょうじん	「精進」とは自分の設定した目標まで突き進む「勇氣」と「達成力」を指します。 上手に頂上を目指すにはコツがあります。 例えば、山登りと言えば、登山開始から最終目標である頂点だけを目指して進めば途中で挫折する可能性が高くなります。 そこで大切な事が、BC,1C,2C,3Cと細かく目標地点を設定し、的確に歩みを進める事です。 細かい目標設定により、大きく崩れる事を防ぐと共に、長い歩みの中でちょくちょく達成感を感じ、ココロが折れづらくなります。 仏教では、目標設定を大切にします。そしてそこへ向けてコツコツと仮目標を通過して進む事で「勇氣」と「達成力」が鍛えられると教えています。
少欲知足	しょうよくちそく	欲を少なく満足する事を知る、という意味です。 仏教は「欲を減して、無くしていく」という教えだと思っている方は多いのではないのでしょうか？ しかし、みなさんが欲を無くしてしまっただら経済は回りませんし、人の為に行動する！という欲も否定する事になってしまいます。何か無気力な世捨て人が沢山出来てしまうイメージですね。 仏教の伝えたい事は「欲のコントロール」です。 「欲を減する」と使われますが、この「減」の原語は「ニローダ」と言います。 これは「制御する」「コントロールする」といった意味があります。 つまり欲には「良い欲」と「悪い欲」があり、なるべく良い方向へコントロールしてあげる事が大切になります。 少欲知足を正しく解釈すれば、「悪い欲を少なくし良い方向に向ける事で、ココロが満たされる事を知る」となります。
図に乗る	ずのにる	一般的には、つけあがる、悪乗りする、という意味が使われます。 元々は、声明の転調を「図」といい、難しい転調が成功することを図に乗る(上手いく)と言いました。声明とは仏教の儀式において経文に節をつけて朗唱する声楽の総称で、古代インドに起り、仏教とともに中国を経て日本に伝えられたものです。 ですから、図に乗るとはネガティブな意味ではなく、本来は、少し難しいかな、大変かなという事にチャレンジをして、上手いく成功することを指します。
誓願	せいがん	仏教では誓いを立てる事を非常に大切にします。行動を伴う願いを誓願と呼びます。 “願い事”というお寺や神社でお賽銭を入れて「彼氏ができますように！」というのが一般的ですが、仏教には「願い事」のお作法があります。 1、感謝をする。 まずは日々を思い直し、嬉しかった事や有難かった事に感謝します。 2、誓いをたてる。 目標を誓います。その時に大切な事は「他者の為になる」事を誓います。「今年は部下に優しく接します」とか「今年は人の悪口を言いません」と誓います。 3、自分の願いを伝える。 やっとここで自分の願い事を伝えます。ここは「自分の為になる」事で大丈夫です。 この一連のお作法を「誓願(せいがん)」と言います。仏教発祥の地インドでは「真実の言葉には不思議な力が宿る」という思想があります。 インド語では真実の言葉は【satya (サティヤ)】と呼ばれます。 自分が何らかの誓いを立てて、その言葉が真実になるように日々努力する事で【satya (真実の言葉)】の力が貯まり、それによって願い事が叶う、という考えです。
禅定	ぜんじょう	強いココロをつくる基礎となる“集中心”を鍛えるのが「ディヤナ」です。 端的にいうと瞑想ですが、けっして形式にとらわれる必要はなく、自分のライフスタイルの中で、「ココロを調える」時間を取り入れる事が大切です。 日常的に「ココロを調える」トレーニングをすると、次第に集中心が鍛えられてきます。 それによって、下記の2点の変化があります。 →自身の生理的变化に気づきやすくなる。呼吸の変化や感情の変化に気づきやすくなり、ココロのコントロールが楽になる。 →思考の連鎖、感情の連鎖を早めに断ち切りやすくなり、負のスパイラルから脱却する事が可能となる。 これを実践するには瞑想はもちろん、読書、家事や掃除を丁寧に行う、という事でも鍛えられます。日常生活で意識して行動する事が大切です。
卒塔婆 塔婆	そとうば とうば	サンスクリット語【s:tūpa (ストゥーパ)】の音写です。 もともとはお釈迦様のご遺骨を納めた塔であると共に、お釈迦様そのものと見なされてきました。 クシナガラでお釈迦様が亡くなった後、そのご遺体は火葬されました。 ご遺骨は舎舍利(ぶっしゃり)といい、お釈迦様を慕う部族に八等分されました。 そして、その舎舍利を納める為に塔がたてられ、信仰の対象となっていきました。この塔をストゥーパと言います。 現在では、その塔の形を模した板を卒塔婆と呼び、お墓に供養としてたてる風習へと繋がっています。
諦	たい	諦(たい)という言葉は、諦めるという言葉で使われる事が多いですね。 諦めるというと、ギブアップという意味で理解されている方も多いと思います。しかし諦めるの「諦」とは真理を意味する言葉です。 つまり諦める、とはギブアップではなく、明らかに観る事、現実をありのまま観察する事を意味します。大切な仕事、人生の岐路になるような決断の時こそ「諦める」ことが肝心です。

退屈	たいくつ	日常の言葉としては暇で飽きあきすることを言います。 動詞として「退屈する」という形で用いる事が一般的です。 元々の仏教の用例としては、求道心（くどうしん）が退き屈した状態を表します。 仏道修行に掛けてしまい、疲れて嫌気がさしている状態です。 サンスクリット語としては [kheda（ケーダ）] 怠惰という言葉や、 [hiyamana（ヒーヤマナー）] 捨てられつつあるという言葉が多く使われます。
大黒天	だいこくてん	〈大黒天神〉とも、またサンスクリット語の音写で〈摩訶迦羅（まかから）〉とも呼ばれます。 元々は自在天（じざいてん）の化身で軍神、戦闘神、富貴爵禄の神、また堂舎厨師の神とされます。 室町期に入ると大黒主命（おおくにぬしのみこと）の民俗信仰と結合して微笑の相が加わり、江戸期になると米俵に上坐する福相となり、陽気なおじさんの風貌になります。 原語のMahākāla（マハーカール）はmahā（大いなる、立派な）とkāla（黒い、時）という言葉の合成語です。Kālaは〈作る・行う〉という言葉から生まれた言葉で、死という意味も含みます。インドにおいて〈時間を区切る、作る〉と言いますと〈死〉を意味します。 そのような意味合いから、冒頭の通り、インドにおいては〈死を司る神・軍神〉として信仰を集めていました。陽気なおじさんのイメージとは少し違って見えるかもしれません。
醍醐味	だいがみ	一般的に「醍醐味（だいがみ）」と言えば、本当の面白さ、かけがいのない楽しみという使われ方をします。元々はインドにおける五味「乳味（にゅうみ）・酪味（らくみ）・生酥味（しょうそみ）・熟酥味（じゅくそみ）・醍醐味」の一つです。サンスクリット語 [maṇḍa-sarpi（マンダ・サルピ）] や [sarpiṣ- maṇḍa（サルピス・マンダ）] の訳語であり、極上の乳製品やバターの事を表します。 ですので、醍醐味とはバターの味と言えます。それが転じて極上の味、この上ない美味なものを指します。 諸説ありますが、カルシウムと [sarpiṣ- maṇḍa（サルピス・マンダ）] を組み合わせると命名されたのが〈カルピス〉だと言われます。
対治	たいじ	一般的に「対治」という漢字を使用することが多いですが、対治は当て字であり正しくは対治となりません。 意味としては、相手に向かい合って正しく導き、その障害になるものをしりぞけ除くことを指します。また個々の煩惱の迷いを断つことも意味し、個々の障害を対症的に断じてゆくことから、病気を治す意味にも使用されるようになりました。 対治はサンスクリット語 [s: pratipakṣa（プラティパクシャ）] の訳語で、道によって煩惱を断ずることです。対治する道は四種類あり、加行道（けぎょう）「煩惱を断ずる予備的修行」、無間道（むけん）「直接に煩惱を断ずる修行」、解脱道（げだつ）「真理をさとり解脱を得る修行」、勝進道（しょうしん）「より優れた修行により解脱の完成に邁進する修行」があります。
大丈夫	だいじょうぶ	一般的には、きわめて丈夫であるさま。ひょうじょうにしっかりしているさま。非常に気強いさま。指して使われる事の多い言葉です。 元來は、身の丈（たけ）、学識人徳の備わった人や最勝者を、漢語で〈丈夫（じょうぶ）〉とほめ讃えました。後にシルクロードより仏教が伝来し、大の美称が付され〈大丈夫〉となり、仏の呼び方の一つとなりました。 仏には一般的に10種類の呼び方が存在します。 これを〈如来の十号（じょうらいのじゅうごう）〉と言います。 そのうちの1つに〈調御丈夫（じょうごじょうぶ）〉とあり、「人を導くのに巧みな人」という意味の異名があります。 仏教語としての〈調御丈夫〉や〈大丈夫〉は、仏の尊称として用いられる言葉です。
達磨	だるま	一般的には、縁起物として広く親しまれている置物をイメージする方が多いと思います。多くは赤色の張子（はりこ）で製作されます。 インドから中国へ仏教を伝えた僧侶の達磨が壁に向かって座禅を続けて（面壁九年（めんぺきくねん））手足が腐ってしまったという伝説にちなみ、手足がなく、顔が大きく描かれている。 白目のまま販売され、祈願のため左目に黒目を書き入れ、成就すると右にも黒目を入れる「目入れだるま」の風習が、江戸時代に始まって以降、今日まで続いています。 僧侶である達磨の名前の由来は、教えや法を意味するサンスクリット語の [dharma（ダルマ）] からきています。
端正	たんしょう	一般的には「たんせい」と読みますが、仏教的な読み方は「たんしょう」となります。 容姿端正など使用される言葉ですが、姿形の正しいこと、きちんとしていることを指します。 また、行儀や姿が整っていて乱れることなく立派であること、その身のなしを指します。 一般的には、外見を指して使用される事が多い言葉ですが、本来はその人の内面を含めた、佇まいやあり方、所作を指して使われる言葉です。
旦那	だんな	一般的には、妻が夫を呼ぶ場合や、商人などが得意客を呼び、また目下の者が目上の者を呼ぶ時に使われる言葉です。 元々はサンスクリット語の [dāna（ダーナ）] の音写であり、布施を意味します。 妻が夫のことを旦那と呼ぶのは、働いて給料を家庭に持ってきてくれるという事に由来しています。それ以外の用例としても、布施をしてもう側が布施してくれる側を指して旦那・檀那と呼ぶ事が多く、寺院は檀那の家を指して檀家と呼ぶ事が一般的です。
断末摩 断末魔	だんまつま	一般的には「断末魔の叫び」などと言ひ、死に際の状態、そのものが苦しむ様を表した言葉として使用されます。 近松門左衛門の浄瑠璃などにはよく用いられ、「断末魔の音」などの用例は鎌倉時代から存在し、江戸中期ころから日常化した仏教語だとされます。 末摩（まつま）はサンスクリット語 [marman（マルマン）] の音写で、身体の致命的な場所を指します。マルマンを断つことは、すなわち息を引き取る寸前を表し、死の瀬戸際という事になります。
智慧	ちえ	端的に言うと様々な「気づき」を指します。 知識は知る事によって得る事が出来ませんが、智慧は体験・経験によって得るものです。 日常生活を意識的に行動すると様々な気づき（智慧）を生みます。行動によって得た気づきは、その人の体験・経験です。 経験による様々な気づきにより、今まで気づけなかった「角度」や「視点」でモノゴトを捉える事が出来るようになります。 今までと違う角度でモノゴトが見えてくるというのは「ココロ」が変化してきた証拠です。 その気づきはイノベーションの源泉となり、自分の経験によるものなので自信へとつながります。 また、生まれた気づきを記憶する事も大切です。 ブッダは瞑想により得た智慧を記憶に留め、瞑想から出て行動に移しました。 せっかくの気づきも逃してしまつてはもったいない。記憶したり記録しましょう。
知恩	ちおん	「恩を知る」と書いて知恩と呼びますが、自分の幸福度を底上げする大切な行動です。 簡単にいうと、私たちは日常の中で様々なモノゴトから恩恵を頂き生きています。 その事を意識して感謝する事です。 感謝する言葉「ありがたい」の逆は何でしょうか？ それは「当たり前」です。 私たちが日常の中で、家族や職場の人から頂いている「恩」は、最初「ありがたいな〜」と感じていても、無意識にそれは「当たり前」になり、次第に「恩」に気がつかなくなるものです。 とすると、より多くを求めたり、感謝の気持ち伝える事をしなくなってしまいます。 これでは周りとの関係が上手くいかなくなるばかりか、自分自身の幸せも逃してしまっているのです。 大切な事は、周りに多くを求める前に、一度、自分がどれくらい周りの人に支えられているか、どれくらい多くの「恩」を頂いているかと、気がつく事です。
畜生	ちくしょう	くやしさを表現する言葉で「こんちくしょう!!」という事があります。 これは「この畜生!!」が転じたもので、いまましい時や人を罵る時に用います。 畜生はサンスクリット語 [tiryañc（ティルヤンチ）] の訳語です。 横に這っていくものという意味です。 元々は悪い行いの結果、這いつくばって生きるものに生まれ変わる事を表しますが、漢訳としての畜生の意味は今日と同じ、人間に飼育される家畜を指します。 仏教では、地獄・餓鬼・畜生の三惡道を説き、人間が悪業の報いで死後に生まれ変わる世界を表します。
知事	ちじ	現在では、県や府、都の行政の長を指す言葉です。 本来は寺院の雑事や庶務をつかさどる役職名であり、サンスクリット語 [karma-dāna（カルマ・ダーナ）] の訳語です。古くインドの僧院における役名として存在していました。 知事は知院事の略であり、さまざまな別称があります。 サンスクリット語から読み解くと、karma（カルマ）は業と訳され、行いや行動を表します。そしてdāna（ダーナ）は布施や布施をする者を指します。 つまり、自分の行動や労力を布施する、広く人々の為に施す人を「知事」と呼ぶのだと理解出来ます。 現在の用例も、本来の意味に近い使い方であって欲しいものです。
中道	ちゅうどう	「中道」とは、真ん中だと捉えられる事が多いですが、真ん中ではありません。 常にA-Bの真ん中を指す言葉は「中庸」です。中道はその場でベストな選択をする事を指します。 例えば、4本の弦を持つ琵琶という楽器があります。1弦から4弦まで大きさが異なりますよね。この琵琶をチューニングする時に、もし1弦の張力と同じ強さで4弦をチューニングしようとしたら、強すぎて切れてしまいます。逆に4弦の張力で1弦をチューニングしたら弱すぎて音がでません。 1弦には1弦に適した張力があり、4弦には4弦に適した張力があります。 それぞれに適した選択をする事を「中道」と呼びます。常に真ん中というわけではありません。
長老	ちやうろう	現在では、年長者、老齢の人を表す言葉として用いられる事が多いです。 本来の仏教語としての意味は、年長にして学徳のある者を指し、必ずしも老齢の者というわけではありません。サンスクリット語 [skt.shtavira（スタヴィラ）] は、年老いた、尊敬すべきという形容詞にもとづきます。 [āyusmat（アーユシュマツト）] は、相手に敬意をもってよぶ呼称であり、寿命をもてる者という意味で、尊者とも訳されます。

追善	ついぜん	一般的には、亡くなった方の冥福を祈るために、四十九日、百ヶ日、年忌に仏事を行うことを指し、追善供養という言葉が生まれました。 元々は、死者のために追って福を薦（すす）める追薦（ついせん）という言葉で、それが転用され追善となりました。 死者の冥福を祈って、追って功德を積む事ですが、本来は仏像や堂塔を建立したり、物品を寄進すること、また死者の為に写経をすることも追善とされました。
徹底	てっぺい	一般的には「徹底する」や「徹底的に〜」という形で、行動・態度・思想が中途半端でないことや、すみずみまで行きわたること、を意味する言葉として使用されます。 原義は「底を徹る、底まで到達する」という意味であり、仏教の三獣渡河（さんじゅうとが）という故事が由来しています。 河を渡る時、うさぎは水の上を泳ぎます。馬は足が水中にあり、懸命に掻きまわります。そして象は、足をしっかりと水底につけて渡ります。 この3匹の動物をそれぞれ、うさぎ＝声聞（しょうもん）、馬＝縁覚（えんがく）、象＝菩薩（ぼさつ）に例えられています。 ざっくりですが、声聞と縁覚は、修行途中の段階に対して、菩薩とはより深い修行の段階で覚りへの最終状態といえます。 その為、象は最も深い覚りを得た者を意味し、徹底という言葉は、この象のように覚りの河を渡る時も、底にしっかりと足をつけて歩み、物事の内面まで貫き通す事を意味しています。
投機	とうき	一般的に投機というと、損失を見込み危険を顧みず大利益を得ようとする行為、思わく買いを指します。 投機取引、投機目的など用いられます。 しかし、仏教では投機の機とは、はたらきの意味であり、宗教的な素質を意味します。 つまり（投機）とは、言葉通り機を投ずることであり、自らの宗教的素質を全てさらけだし師匠と弟子が意識の疎通、宗教的素質をひとつする事を表します。 それは、修行者が仏教の求める精神に適した状態になる事を表した言葉です。
どっこいしょ	どっこいしょ	山岳修行する行者が「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」と唱えながら山を歩き、その掛け声が、時代を経て「どっこいしょ」という言葉に変化したと言われます。 六根の根は【sindriya（インドリヤ）】の訳語です。 インドリヤには感覚機能や力という意味があります。 また、六根とは、眼根（視覚）、耳根（聴覚）、鼻根（嗅覚）、舌根（味覚）、身根（触覚）、意根（心）の六つの根の総称です。 仏教では器官そのものよりも、その働きを重視する見方があるので、働きの意味を含む「根」という訳語を用いたと思われる。
忍辱	にんにく	言葉通り外界からのプレッシャーや摩擦になどに耐え忍ぶという意味があります。 しかしみんだけではなく、自分自身の出来ない部分、見たくない部分も認める。というのが忍辱の本来の意味となります。 他人の失敗は目につきやすいのが人の常ですが、自分の失敗に目をそらさず認める事で忍耐力が向上します。モノゴトを他者の所為にしない事が、問題の本質を捉えやすくします。 また、モノゴトを正しく認識する事が他者に寛容になる事に繋がり、結果的に人間関係が良好になります。
般若	はんにか	般若というと、能く用いる般若面、恐ろしい鬼女の仮面を想像するかと思います。 しかし、般若の語源となる【paññā（パニヤナー）】はパーリ語で〈智慧〉という意味の言葉です。 パニヤナーの音写が般若となりましたが、なぜ般若面が恐ろしい顔なのかは不明です。 お酒の酔顔を般若湯（はんにかとう）と呼ぶことがあります。智慧の湧く飲み物という意味でしょう。 そして、智慧の湧く飲み物も飲みすぎると、幸いつらい二日酔いに悩まされますよね。その時の顔なかもしれません。
琵琶	びわ	胡琴（こきん）とも呼ばれる、東アジアの中国、朝鮮、日本などで用いられる和楽器の一種類です。 この語源はサンスクリット語【vīṇā（ヴィーナー）】の音写であり、仏教とともにインド、中央アジア、中国経由で奈良時代に唐から伝えられました。 日本では、広義の僧侶ではありませんが仏教教団に属し、衣を身につけ、琵琶を演奏しながら経典を読む、または物語を語り歩く（琵琶法師）が有名です。 そのような歴史からも、仏教に縁の深い楽器の一つです。
無事	ぶじ	一般的には、取り立てて言うほどの変わった事がないことや危険・不幸・災いなどが起こらない状態を指します。 元々の意味は、依り所となる実体や物質【s:vastu（ヴァストゥ）】がないことを意味します。 一般的な安穩である事、やることなく暇である事など、これらの意味は肯定・否定どちらの意味でも用いられますが、禅宗等では〈無事〉を一切の作為を離れた自然あり方として尊ぶものとして受け入れられています。 これは〈無為自然〉を大切にする老荘思想の影響とみられます。
布施	ふせ	布施というと「お寺や神社にお金を布施する」というイメージが強いかと思います。 しかし、布施の原語「ダーナ」は「自分の大切なモノを提供する」という意味があります。 お金も自分の財産という大切なモノですのでダーナですが、ダーナ出来るモノはそれ以外にも沢山あります。「笑顔で接する事」や「優しい言葉をかける」というのも立派なダーナです。 「笑顔」も「優しい言葉」もみなさんの持つ大切な財産です。 また「電車で席を譲る」というのもダーナです。 「席に座る事が出来る」という大切な権利を提供しています。 また、ボランティア活動も大切な時間を提供していますので、ダーナです。 このように、ダーナとはお金だけではなく、日常の「気遣い、気配り」が大切なダーナに繋がるという事になります。 ちなみに、原語のダーナが日本語に訳され「旦那（だんな）」となりました。
偏袒右肩	へんだんうけん	ひとえ（偏）に右肩をかためく（袒）、という言葉の通り、身体を覆っている衣や衣服を右肩だけ脱ぎあらわにした状態を指します。 古来より仏教では、相手に敬意を表す時に右肩をあらわし、左肩のみを袈裟で覆いました。 諸説ありますが、右手が利き手である人が多く、右手をあらわにする事は、攻撃しないことを示すものとして礼法となった。また、食事など清浄なことに使う右手に対し、左手は不浄なものも扱う手なので覆って隠す、などの考え方もあるようです。
報恩	ほうおん	「報恩」とは知恩と対になる言葉です。 周りから何かしてもらったら、その方へ「ありがとう」と感謝して恩返りする事は大切ですが、仏教ではさらに一歩先へ進めます。 「頂いている恩に気づく事（知恩）」が出来たら、今度は「自分も誰かに恩を送ること（報恩）」をします。つまり自分も誰かに自分の出来る事で「恩を送る」という行為が大切です。 「恩」を自覚したら、今度は「恩」を送って「恩の循環」をしてあげましょう。 それは巡り巡って自分を幸せにする行為です。 「ありがとう、と言おう」「ありがとう、と言われよう」と意識して行動する事が大切です。
菩薩	ぼさつ	ブツダを目指して努力する人を指します。 “ボサツ”というと弥勒菩薩と観音菩薩など、仏像を思い浮かべるかもしれませんが、“ボサツ”というのは生き方です。ですので、固有名詞ではなく一般名詞になります。 元々は釈尊の修行時代を指していましたが、後に固有名詞から、一般名詞化しました。 誰でも“ボサツ”という生き方を実践出来ますし、“ボサツ”的な人は沢山います。 では、どういう人がボサツ的呢でしょうか？ 簡単に言うと、ボサツとは「自分の幸せと他者の幸せを重ねて行動出来る人」の事を指します。 自分の幸せだけを考え行動する事は簡単ですが、自己中心的になり周りを幸せに出来ません。 周りの幸せだけを考え行動する事は、自分を大切に出来ないで継続出来ません。 自分も他者も同時に幸せにする生き方が“ボサツ”です。 本当の自分の幸せとは“他者を幸せにする事”によって成立します。 自分の本当にやりたい事で他者を幸せにする、それが結果的に自分を幸せにする事に繋がる、という事を大切に行動出来る人は、みな“ボサツ”的な人です。 これを専門用語では〈上求菩提・下化衆生（じょうぐくばいどい・げけしゅじょう）〉といえます。 仏教はこの生き方を目指します。
法螺	ほら	一般的には「ほらを吹く」といえば、でたらめなこと、おかげさに物事を言うことを表します。 これは、法螺という仏具の音が大きいことに由来すると思われる。 法螺はサンスクリット語【dharma-sāṅkha（ダルマ・シャンカ）】の訳語です。 ダルマは法や教え、シャンカは螺貝の事です。 螺貝で作った楽器が良く響き、遠くまで音が届くので、お釈迦様の説法が遠くまで響き渡る様を喩える為に用いたと言われます。 日本では、法螺は山伏や修験者が仏具として用いるのが一般的です。
本尊	ほんぞん	本尊とは、礼拝の対象として崇拜する仏・菩薩・曼荼羅をいいます。 本尊の語を多用したのは日蓮聖人で、自身は初め立像の釈迦仏を自己の本尊としていましたが、佐渡流罪以降（本門の本尊）として法華經の如来寿量品（にょらいじゅうりょうほん）で説かれる久遠実成の釈尊を本尊としました。 その思想を漢字で図に表したものが十界曼荼羅または大曼荼羅と呼ばれます。
本門	ほんもん	法華經は28章ありますが、その前半14章を〈迹門（しゃくもん）〉、後半14章を〈本門（ほんもん）〉といえます。 中国の天台大師智顛（ちぎ）が法華經を解釈する際に、この2つに分けました。 日蓮聖人は、後半の本門に基づき思想体系を形づけられました。

曼荼羅 曼陀羅	まんだら	サンスクリット語の[māṇḍala (マンドラ)]の音写。 意味としては、広く「円状のもの」を指します。 [māṇḍala] は、インドにおいては、とくに神々や仏・諸尊を安置して祭るために、円形状や方形に仕切られて聖域化された場所を意味しました。 儀礼の為に、一時的に壇を設け、粉や砂を用いて表現するのが通例でした。 しかし仏教がインド以外の地に伝わる中で、掛け軸などに表わす形式が一般的になりました。現在馴染みのある〈胎藏曼荼羅〉(金剛界曼荼羅) また日蓮宗の〈十界曼荼羅〉など、多くの形式は掛軸に記されたものです。
迷惑	めいわく	一般的に「迷惑する」というと、ある行為がもて、他の人が不利益を受けたり、不快を感じたりすること、又そのさま、を指す言葉です。 仏教では『法華経』方便品などにあるように、心の迷いや、道理に迷うこととされます。 〈悟り〉の対義語で、 真実の智慧が無く、道理に反したことに對して盲目的に執着すること も意味します。
滅	めつ	一般的に滅というとは、消え失せる、ほろびる事を意味します。 しかし、原語のnirodha (ニローダ) は制止する、コントロールするという意味の言葉です。仏教でよくつかわれる「欲望を滅する」とは、欲を無くせ、欲を消しなさい、という意味ではなく、欲をコントロールして向き直らなさい、という意味になります。欲というものはエネルギーの源です。 私たちが悪い方向に向かわせるエネルギーにもなりますが、向き直らなさいというエネルギーにもなります。その欲を無くすのではなく、より多くの人の為、より向き直らなさいという方向にスイッチしてあげる事が大切です。
滅法	めつぼう	一般的に「滅法強い」など、常識外れた〜という意味で用いられます。 本来は因縁によってつづられないもの、または涅槃を意味します。 また物事が消滅するという意味から、死ぬことも表します。 しかし時代を経る中で〈滅法〉という漢字の通り、法を滅するの意味を取って、さらに無法者の無法と同義に使われるようになり、「めっちゃくちゃ」というような副詞的に用いられるようになったと推測されます。そこから、さらに変化し、非常に〜や、法外に、のような意味として用いられるようになりました。
問答	もんどう もんたい	禅門では、仏法修行者が教えについて問ひかけ、禪の指導者が応答することを指します。 また、その逆により学ぶ者の修行内容の真偽や真実への開眼をうながすべく啓蒙にも行われます。 釈尊の教化方法は相手との問答によって、その人それぞれの教えを説き導くことが主でした。それが多くの教説、教えが残っている所以です。
油断	ゆだん	油断大敵、油断は怪我の元、などの諺にも使われます。 また、油断するという動詞としても用いられる言葉です。 〈油断〉の起源は多くの仏典に垣間見られます。 例として、『涅槃経(ねはんぎょう)』には、次のような説話があります。 ある王様が臣下に油の入った一つの鉢を持たせ、行動する時にもし油を一滴でもこぼせば、お前の命を断つであろうと告げ、抜刀した家来をその臣下の後につけさせました。 鉢を持った臣下は注意深くその鉢を持ってゆき、ついに一滴も油をこぼすことがなかったといいます。 このように注意深くあることで、油を断つことがなかった、という事から〈油断〉という言葉が生まれます。また初期仏典には、神仏に捧げる灯火を絶やさぬよう、油を断たないよう大切に、という教えも多く存在し、そこから〈油断〉という言葉が生まれたという説もあります。 いずれにしても、古代インドでは〈油〉というものが大変貴重な物であり、不注意で油を損失してしまわないように、戒めの言葉として〈油断〉が生まれました。
喇叭	らっぱ	一般的にはトランペットやホルンなどの金管楽器をいいます。 ラッパ飲み、ラッパ吹きなど、ラッパにちなんだ言葉は非常に多いです。 ラッパの語源はサンスクリット語の [śrāva (ラヴァ)] の音写です。 叫び声、号音、動物のほえる声などを意味します。 叫ぶという意味の動詞を基にして、上記のような言葉がつけられます。
利益	りえき りやく	仏の教えに従って得られた恵みや幸せのことを指します。 サンスクリット語 [s:upakāra (ウパカーラ)] [s:artha (アルタ)] などが当てられます。 いずれにしても「 ためになること 」を表します。 仏菩薩からの霊験を「ごりやく」と言います。 利益には自利(じり)と利他(りた)があり、自利の利益を功德、利他のそれを利益といえます。
輪廻	りんね	サンスクリット語[s:samsāra]の訳語。 もとの意味は、ともに流れる。 生ある者はこの世だけでなく、死後も何らかの形で存在していくという思想がウパニシャッド哲学時代 [BC1000年~BC500年] からあり、業の考え方も結びついてきました。 生あるものが迷いの世界に生まれ変わり死に変わるといふ輪廻思想へと発展していきました。
靈魂	れいこん	一般的に、身体の中に存在し、死後はそこから離れていくと信じられている見る事の出来ない存在と認識されています。 〈靈〉〈魂〉〈命〉〈心〉とも近い存在です。 国や地域によって捉え方に差異があります。 インドでは[s:jīva (ジーヴァ)]という言葉が近い意味を持ち、身体を支え、生き物を生かす命というような原義があります。 中国では、靈魂に関する事柄は(魂魄(こんぱく))や(神(しん))という考え方が類似します。 日本においては、仏教受容後に亡き両親や身内を(先靈)として扱い供養を行う儀礼が増えました。盂蘭盆会などの先祖供養が行われるなかで、次第に伝統的な祖霊観と仏教の成仏観が重なっていきました。
蓮華	れんげ	インド人は蓮華が大好きです。 涼しさの象徴であると同時に、清浄さの象徴だからです。 とくに仏教徒は蓮華を大切にします。 お釈迦様は「ハスの生き方に、人としての生き方を学びなさい」と言いました。 ハスがどのような場所に咲いているかイメージして下さい。 決して気高く山の上でも、綺麗な花畑でもありません。泥の沼地です。 しかし、その場所が嫌だと言って逃げ出したりしません。 その沼地にしっかり根を張り、泥の中から養分を吸収し、立派な花を咲かせます。 その花も泥に染まる事なく、本来自分の持っている色「白や青、薄ピンクなど」を咲かせます。 それは、まさに人としての姿勢を示しています。 泥の沼地は、私たちが生活する現実世界です。楽しい事や嫌な事、悲しい事など様々なモノゴトが混ざった場所です。しかし、そこから目を逸らしてどこか楽しく楽な場所を探しても見つかりません、成長出来ません。 その沼地のような現実世界を見つめ、その地へ足を着けて養分を吸収する事で人は成長します。 そうする事で泥に染まる事なく、本来自分の持っている色「自分の才能や価値」を咲かせる事が出来るのです。
六道	ろくどう りくどう	いのちあるものが行為の結果として赴く6つの世界を表します。 または六趣(ろくしゅ)ともいいます。 趣は [s:gati (ガティ)] の訳語で赴く所を意味します。 六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天(神)の6つの世界の総称です。 この六道を迷い続けることを六道輪廻と呼びます。
露地 露路	ろじ	一般的には屋外や外の何もなところを意味する言葉です。サンスクリット語では [s:ābhyaṅkāśika (アービヤヴァカシーカ)] と云い、覆いのないところ、野外に座って行う修行の一つを表します。 さらに露地は煩惱を脱却した境地も表します。 この場合、煩惱を覆い(cover)にたとえ、その覆いを取り払った状態(discover)を表現しています。 『法華経』譬喩品には三車火宅の譬えがありますが、長者が息子を助け出す為に、家の外(露地)に大白牛車を用意して、外へと導きますが、外である露地は煩惱の炎から脱却した安らかな場所を表しており「露地の白牛」という言葉も生まれました。